

ゲルマン語における話法の助動詞について

Über das Modalverb im Germanischen

鹿兒嶋 繁雄

桐蔭横浜大学法学部

(2012 年 9 月 29 日 受理)

1. 話法の助動詞(法助動詞)の(話)法とは、「自分の陳述内容に対する発話者の主観的・心的態度・様態を表す語彙である。」⁽¹⁾ 主観が支配する陳述であるので歴史的には同じ意味内容が、異なった語彙を用いて表現されている。

英・独の現代語で特異な表現の違いは、否定を伴う場合で、英語 *must not* はドイツ語では *nicht dürfen* でなければならない。逆にドイツ語の *nicht müssen* は英語では *need not* でなければならない。

(1) *Wir dürfen jetzt den Mut nicht verlieren.*

We must not lose courage now.

われわれは今勇気を失ってはならぬ。

(2) *Du mußt nicht vor mir erschrecken.*

You need not to be afraid of me.

君は私をこわがることはない。⁽²⁾

dürfen は、「許されている、・・・してもよい」、*müssen* は、①自然的必然「・・・ねばならぬ、・・・せざるを得ぬ」②論理的必然「・・・にちがいない」の意味であり、それぞれの否定は、(1) ドイツ語 *nicht dürfen*: 「許されない→・・・してはいけない」、英語 *must not* は、「・・・しないことが義務である」の意味であり、禁止を表す場合 *must* を直接否定できないことに特徴がある。

(2) の *nicht müssen*: 「・・・ねばならぬことはない→・・・しなくともよい、・・・しない方がよい」は忠告・勧告の意味であり、この場合の意味では、英語も *must not* を用いる。

「禁止」という同じ意味内容を表すのに、英語は「義務」+否定、ドイツ語は「許可」+否定という語彙を使う。「義務」「許可」という抽象的なことばの歴史的経緯を最古の文献から中世にかけて探索していく。

2. *got.ga-môtan* は、*müssen* の語源か？

語源辞典によると、*müssen, must* の文献資料に裏付けられた形は、ゴート語 (*got. 4 C*) の

ga-môtan である。⁽³⁾

(3) Got.Mc.2,2 jah suns gaqemun managai, swaswejuþan ni gamstedun nih at daua, jah rodida im waurd.⁽⁴⁾

現代ドイツ語 (NHD.) 同上 Und es versammelten sich viele, so daß sie nicht Raum hatten, auch nicht draußen vor der Tür; und er predigte ihnen das Wort.⁽⁵⁾

同上; 大勢の人が集まったので、戸口の辺りまで すきまもない ほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、

(4) ラテン語 (Lat.) 同上 et convenerunt multi, ita ut non caperet neque ad ianuam, et loquebatur eis verbum Lat. では、capere 「とる、(目的をもって) 引き受ける、(努力して) 地位を手に入れる」を用いている。

(5) Got.2Cor.7,2 gamoteima in izwis; ni ainummehun gaskoþum, ni ainnohun bifaihodedum Lat. 同上 Capite nos. Neminem laesimus, neminem corrupimus, neinem circumvenimus.

Lat. では、Mc.2,2 と同様 capere を用いている。

NHD. 同上 Gebet uns Raum in euren Herzen! Wir haben niemand Unrecht getan, wir haben niemand verletzt, wir haben niemand übervorteilt
わたしたちに心を 開いて ください。わたしたちはだれにも不義を行わず、だれも破滅させずだれからも だまし取ったり しませんでした。

ga-môtan の意味は「余裕、余地がある」(Raum finden, Raum haben können)⁽⁶⁾ であり、ゴート語ではラテン語同様、多義的で抽象的なことばである。

(6) Got.J.8,37 Vait þatei fraiv Abrahamis sijub; akei sokeiþmis usqiman, unte vaurd mein ni gamot in izwis,

NHD. Ich weiß wohl, daß ihr Abrahams Kinder seid, aber ihr sucht mich zu töten, denn mein Wort findet bei euch keinen Raum.

あなたたちがアブラハムの子孫だということは分かっている。だが、あなたたちはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉を 受け入れない からである。

Lat. 同上もやはり capere を用いている (non capit vobis)。

古高ドイツ語 (750-1050 AHD) では got.ga-môtan を bi-fahan (理解する、NHD. fassen, ラテン語 capere) という別系統の語彙を用いている。

(7) AHD.Tat.131,15 (J.8,37) Ih uueiz thaz ir Abrahames barn birut : ouhir suohhet mih ziarlahenne, uuanta min uuort ni bifahit.⁽⁷⁾

あなたたちがアブラハムの子孫だということは分かっている。だが、あなたたちはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉を 受け入れない からである。

興味深いことに、(5) の got.2Cor.7,2 bifaihon と (7) の AHD.Tat.131, 15 (J.8,37) の bi-fahan は同系統の語彙のように思える。ゴート語は bifaihon 「騙す übervorteilen」、AHD. bi-fahan は「理解する fassen」と意味の隔たりはどのように解釈すべきであろうか。Got.faihu はまさに「お金」である。AHD. bi-fahan 「理解する fassen」は、むしろ現代語 Geld からの派生語 gelten 「通用する」と解すべきで、ゴート語は ni ainnohun (nicht niemand) と二重否定である。

(8) Got.Mc.14,11 ip eis gahausjandans faginodedun jah gahaihaitun imma faihu giban

Da sie das hörten, wurden sie froh und verhießen, ihm Geld zu geben.

彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。

Got. の動詞 ga-môtan と名詞 mota (収税所) は無関係なのであろうか。もし、動詞 ga-môtan

が名詞 *mōta* (収税所) の派生であれば、苦笑すべき語源解釈にならざるをえない。つまり「余裕、余地がある」「理解する」という動詞 *ga-mōtan* の意味は、「収税所との遣り取り」、「収税所との話し合いの余地」であり「収税所との話し合いによる双方の合意」がゴート語の述べている動詞 *ga-mōtan* の意味内容ではなからうか。

(9) Got.Mt.5.5 jah þairhleipands Iesus jainþroga sahv mannam sitandan at motai.

NHD 同上 Und Jesus von dannen ging, sah er einen Menschen am Zoll sitzen,

イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、

Holthausenによると、*mōta* は AHD. *mūta* (Zoll「関税」, Abgabe「税、公課」, Maut「(オーストリア) (道路・橋などの) 通行料金」「(オーストリア) (有料道路の) 料金所」「税関」であり、got. からの借用語で、MHD. *muoze*「暇、暇な時間」古アイスランド語 (ais.) *mūta* (Bezahlung「支払い」) とともに、got. *mitan* (messen「量る」) と関連があるかも知れない (vielleicht zu *mita* ?)、と疑問符を付けている。

古アイスランド語 (Ais.) *mūta* では法律用語で、*a fee*「料金、手数料」, *gratuity*「こころ付け、チップ、求めずに与えられるもの」, *for transacting business pittance*「交渉・業務に関してのわずかのあてがい、わずかの収入」とある。

例として、*gull er grams mūta* (*gold is the king's grant*「金は王の授与」) を挙げている。

mūta (収税所) に発する上記のような意味の変遷を矛盾なく説明できることばは、ラテン語 *monēta*「お金」ではなからうか。ゴート語の *ō* はラテン語 *monēta* の *nē* を省略した「代替延長」で、貨幣経済という抽象的な概念をゲルマン語に導入する際に税収所で取り扱う「お金」を「お金を徴収する所」と意味の拡大が起こったのではなからうか。さらに、「お金」をあらわすラテン語は *monēta* のほかにもう一つ *pecūnia*「お金、財産」(*Geld, Eigentum*) ということがあがる。この単語が、現代語 *Vieh*「家畜」の語源と想定すると、その got. *faihu* は lat. *pecūnia* と *f-* と *p-* の交換であり、ゴート語 *- ai -* の発音は [e] である。lat. *pecūnia* の後半部分 *- nia* を省略したとすれば、「お金→財産→家畜」という意味の流れはそれなりに合理的に説明できるのではないか⁽⁹⁾。

ゴート語のラテン語からの借用はかなりぎこちない。文明語の借用に関してそれは特に顕著である。たとえば、ラテン語 *aestas* ゴート語 *asans*「年齢」、ラテン語 *cadus* ゴート語 *kas*「かめ(葡萄酒・油・蜂蜜用)」など。目の情報である文字ではなく、耳から入った音を直接借用したことばは、やはり借用元のことばとはかなり異なることがある。文字と音と乖離は、借用語ではしばしば起こる現象である。

現代語 *Muße*「暇な時間」「閑暇」「余暇」、*müßig*「無為の」「仕事をしないで(遊んで・ぶらぶらして) いる」、「むだな」「無意味な」、*Müßiggang*「無為」「仕事をせずぶらぶらしていること」は上述の *Maut* とともに語源として Lat. *monēta*「お金」を設定すれば、お金があることによる「閑暇」であり、お金を払う「通行料」ということばは、その要としての役割を果たしている。

よって、got. *ga-mōtan* は現代語 *müssen* の直接の語源にはなりえないのではないか。

ちなみに、*Maut* という単語が何故オーストリアに残っているかに関して Kluge⁽¹⁰⁾ は、地名 *Mautern* に関して、got. *Mōtārjam*「収税吏のもとに」(*zu, bei den Zöllnern*) を語源として挙げ、これは明らかにドナウ河南岸にあったゴート人の税関から由来している、とある。

3. ゴート語の *mitan* と古高ドイツ語 *mēzzan*

現代語 *müssen*「義務」の意味を文献に求めると、got. *mitan*, AHD. *mēzzan* が有力な候補に

なるであろう。

- (10) got.L.6,38 gibaid, jah gibada izwis, mitads goda jah ufarfulla jah gawigana jah ufargutanagibada inbarm izwarana;þizai auk samon mitadion þiyaiei mitid mitada izwis.

NHD. 同 上 Gebet, so wird euchgegeben. Ein voll, gedrückt, gerüttet undüberfließend Maßwird man in euren Schoß geben;denn eben mit dem Maß, mit dem ihr messet wird man euch wieder messen.

与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、揺すり入れ、あふれるほどに量りをよくして、ふところに入れてもらえる。あなたがたは自分の量る秤で量り返されるからである。

- (11) 古高ドイツ語 Tat.39,4 (Mt.7,2) In themo mezze thie ír mezzet, ist íu gimezzan.

ラテン語 (同上) Et in qua mensura mensi fueritis, metietur vobis.

NHD (同上) und welcherlei Maß ihr messet,wird euch gemessen werden.

自分の量る秤で量り与えられる。

ラテン語の mētior は aus|messen 「正確に測量する」, vermessen 「(土地などを厳密に) 測定する」, zulmessen 「(・・に・・を) 量って割り当てる」, zurücklegen 「(元の場所へ) 戻す、(・・のために切符・商品などを) 売らずに残しておく、取っておく」, beurteilen 「判断する、判定する; 評価する」の意味で、この行為はお金および収税所の大切な機能の一つである。

AHD mëzzan は、中期高地ドイツ語 (MHD) では müezen と ë が üe に割れ、-an が -en へ弱化する。Benecke⁽¹¹⁾ は、got. motjan (begegnen 「出会う」) は英語 to meet, 低地ドイツ語 moeten と、MHD. では muot 「意向」、muote 「出会い、対戦」と関連がある、という。

- (12) Got.L.14,31 aiþþau hvas þiudans gaggands stigqan wiþra anþarana þiudans du wigan ina, niu gasitands faurþisþankeiþ, siaiu mahteigs miþtaihun þusundjom gamotjan þamma miþ twaim tigung þusundjo gaggandin ana sik ?

NHD.Oder welcher König will sich begeben in einen Streit wider einen anderen König und sitzt nicht zuvor und ratschlagt, ob er könne mit zehntausend begegnen dem, der über ihn kommt mit zwanzigtausend ?

また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍してくる敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて考えてみないだろうか。

- (12) swâ sich parriert unverzaget mannes muot 勇敢な勇士の心も様々な色が入り混じったようになれば

der muote was erlâzen der ritter Idêrs unz an die stunt

いわゆる「本動詞」では「必要だ、強制する (nötigen,zwingen)」である。⁽¹²⁾

- (13) ê ich mich lâze müezen⁽¹³⁾ 「わたしが自分に強いる前に」

いわゆる「話法の助動詞」として

① 「神に定められている。(göttlich bestimmt sein, sollen)」;

- (14) die wile ich leben muoz わたしが生きている限りは

② 「願望文、とくに接続法において (mögen ; können, dürfen bes.in optativsätzen)」

- (15) got müeze (=möge) lōnen iu unt ir 神があなたと彼女をお報いくださるよう

③「必然 (notwendiger weise tun, müssen, mit infin.)」

(16) er muos i sweren eide 彼は彼に誓わねばならなかった

(17) daz muose sît beweinen vil manec wîp それを後に多くの高貴な婦人たちが泣かねばならなかった

4. 中世において、すでに現代語の müssen と同じ意味として使われる「義務」をあらわすことばの一番古い由来であるゴート語 mota「収税所」、ga-môtan「余地がある」はラテン語 monêta「お金」が根本にあると仮定すれば以下の過程をたどったのではなからうか。

「義務」を表す意味は、AHD. mēzzan (現代語 messen 量る) を経由して、「収税所で (お金) を払わねばならない」と目的語「お金」だけを動詞にした AHD bi-fāhan 「理解する」は、現代語 gelten「通用する」に受け継がれた。それに対して「量り」の過去「量った」(英語 must) が現在形として使われていう「過去現在動詞」としてまた、「(お金を) 収税所に払わねばならない」というかなり具体的な義務の部分だけが残って現在に至っているように思われる。

注

- (1) 『言語学小辞典』下宮忠雄 P.86～87 (1985, 東京)
- (2) 三好助三郎『新英独比較文法』P. 198,205 (1989, 東京)
- (3) Duden, Herkunftswörterbuch (1973, Mannheim) : Gotische Etymologisches Wörterbuch, Holthausen, F. (1934, Heidelberg)
- (4) Die gotische Bibel, Streitberg, W. (1971, Heidelberg)
- (5) 『聖書新共同訳』(東京、1994)
- (6) Die Ulfilas, Stamm, F. L. (Stuttgart, 1872) , Die gotische Bibel, derselbe
- (7) Tatian, Sievers, E. (Paderborn, 1966)
- (8) Holthausen, F. ibid.
- (9) これと関連して、われわれの Vieh 《家畜》(ゴート語 faihu, 古高ドイツ語 fihu) は特に興味ぶかい。ラテン語 pecunia 《お金》はこの語の確実に古い派生語であり、・・・『インド・ヨーロッパ語族』シュラーダー・オットー P.20 (東京、1977)
- (10) Kluge F.:Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache (Berlin, 1975) Maut の項目
- (11) Mittelhochdeutsches Wörterbuch, Benecke・Müller・Zarncke (Stuttgart, 1990)
- (12) Lexer, M. Mittelhochdeutsches Handwörterbuch (Stuttgart, 1979)
- (13) Das deutsche heldenbuch, 370, 40 Keller (Stuttgart, 1867)